Osaka University Knowledge Archive

Title	キリスト教と他界観 : フィジー・キリスト教の多元性と多義性
Author(s)	橋本, 和也
Citation	大阪大学, 1995, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39413
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【2】

氏　　名	橋本和也（はしもと かずや）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　11935　号
学位授与年月日	平成7年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	**キリスト教と他界観** **－フィジー・キリスト教の多元性と多義性－**
論文審査委員	（主査） 教　授　青木　保 （副査） 教　授　奥　雅博　　助教授　小泉　潤二

論文内容の要旨

本論では，南太平洋の島嶼国家フィジーにおけるキリスト教受容の過程と，現在「フィジー・キリスト教」と言い得るほど独自の姿を提示しているキリスト教会の状況，更にフィジー人の世界観・他界観の総合的・多元的な把握とその多義性の解明を目的としている。

多元性は1つの現象が幾つかの次元に関わるとき，その全体像を捉えるための基本的な認識と関係し，多義性はその現象の意味に関わる。フィジーのキリスト教を扱うときには，複数の領域にわたる現象とともに，それぞれの現象が各文脈において持つ意味（多義性）をも同時に明確にしなければならない。《フィジー文化＝キリスト教文化》という様相を呈しているフィジー人社会において価値観・世界観を理解するには，まずキリスト教会を中心とした人々の活動から始め，そして死者・祖先・神々の世界（＝「他界」）を人々が如何に思い描いているかを研究しなければならない。「他界」の存在は集合的な表象であり，文化的な文脈の中で規定されているが，しかし「他界」の存在との邂逅体験は，例外的な場合を除いてほとんどが個別的で個人的なものである。その個人的レヴェルでの霊的体験の意味を解明せずには，「他界」と現実生活とのダイナミックな関係を理解することはできず，当該文化の理解もおぼつかない。現在でも，キリスト教によって公けの場面から排除され，「テヴォロ」という名の下で一括され，闇の領域に追いやられた「異教」の霊的な存在（土地の精霊，祖先の霊，死者の霊など）の活躍はよく知られている。この霊体験に関しては，いわば「テヴォロ」的な説明，キリスト教的な説明，それに近代合理的な説明などが複数見られる。そして個人のレヴェルにおいてそれらの説明は，局面により，時には対置的に，時には重層的に，そして時には融合的に採用されているのである。

キリスト教受容過程を知る上で，モデルを提示して，キリスト教的な「他界」の説明法と土着のテヴォロ的な「他界」の説明法を設定し，両者のダイナミックな関係を分析することは有効である。しかし実際にはその両者が様々な度合で，対立，融合，変容し，新たな「他界」観が個人的にも集合的にも創出されているのである。それはキリスト教的とも土着的（＝テヴォロ的）とも言えぬフィジー人の「他界」観であり、《多元的他界観》と呼ばれるべきものである。キリスト教の神は，自らが追放すべき対象とした異教の神々によって逆に規定されるという意味において「多様性」の洗礼を受けた。即ち，フィジーにおいてキリスト教の神は「戦い」と「食人」と「一夫多妻」を禁止する神となった。

近年キリスト教に関する研究が活発になり，村落の社会構造とキリスト教殿関係や伝統の創造としての「トゥカ運

動」などの，植民地主義，新伝統，伝統の創造や継承性に関する成果が報告されている。そのような状況の中で，本論の目的を達成する上での理論的な問題点をまとめると以下のようになる。(1)文化変容過程を1つのモデルとして提示すること，(2)そのモデルを1つの「社会劇」として読み解く作業，(3)フィジーのキリスト教会と，宣教師学の分野で語られている「土着化理論」「文脈化理論」などとの関連，(4)「フィジー文化＝キリスト教」（vakavanua＝lotu）といわれる現状は新伝統や継続性の問題と関連するが，その現状の多元的な記述の必要性，(5)(4)との関連で都市化現象・現金経済（近代化）に対する村落中心の「フィジー・キリスト教」の対応と変化などの問題がある。「文化変容過程モデル」はキリスト教の受容のみならず，1987年のクーデターで終わった英国指導型の「民主主義」の変容過程を跡付けることをも可能にする。そこで圧倒的優位性を持つ西洋社会の地元に対する期待と要請に応じる姿勢を示しながら，その西洋的な読み取りを変容させて自らの主体性を維持しようとする地元側の試みが明確になる。

フィジーのキリスト教は，コミュニケーション理論からは，各々の限定コードに属していた宣教師と改宗以前のフィジー人が，接触を機会にそれぞれが相手のコードの影響を受けてそれなりの了解可能な新たな「精密コード」を発展させた所に成立した。しかし今日のフィジーの人々が抱く「他界」観を見ると，「精密コード」は個人の中で「異教的」な「他界」観と重層し，一体化し，また集合的にも了解を得うる新たな「限定コード」に「転換」していると指摘し得る。即ち，現在のフィジーにおいては1つの限定コードとして「フィジー・キリスト教」が成立しており，同じキリスト教徒でも文化を異にする人々には理解し難い世界観・他界観として受け取られる。

「社会劇」の視点から見ると，葛藤はあらゆる社会に日常的に存在している。それが事件にまで発展しないのは，それぞれの葛藤が属す文脈がそれなりの解決法，または事件にまで発展させない方法をいくつか提示しており，当事者は無意識的にか意識的にその方法の中のいくつかを選択し実行しているからである。この意味で事件とは日常的な葛藤が別の新たな文脈に入り込んだときに生じるといえる。新たな文脈でも事態の収拾法は提示されているが，当事者には突然の成り行きでその文脈を明確には読み取れず，事態を破局＝事件に至らしめるのである。「社会劇」として分析の対象となる出来事には複数の文脈が交錯してみられる。特に危機的な状況に出来事を導く決定的な瞬間には，種々に拮抗している文脈の1つが何かのきっかけで急に優勢になったり，別の文脈に転換したり，異種の文脈が交わることにより急激な進展が促されることがある。そのような瞬間をここでは「転換点」と名付けた。「転換点」を発見することにより出来事に影響を及ぼす文脈相互の関係が明確となり，事件の本質，更には当該文化理解のヒントを得ることが可能となる。

「社会劇」の見地から文化接触及び変容を検討すると，西洋文明を背景とする宣教師の文化的文脈と土着の文脈との間で「葛藤」が起こり，矯正，再統合といった「社会劇」的な経過を経て，新たな文脈が形成されたものであると考えられる。調査地の老人が西洋文明を象徴する衣服を着た守護神を夢でみたと語ったことは重要である。夢を人に話したとき，彼は守護神が短パンとシャツを着ていたことを「発見」し，土着の守護神もキリスト教徒になっていたと認識した。この「発見」の時点が《転換点》であった。この転換点で個人内部の祖先の世界とキリスト教の世界が重なり合い，そこが突破口となって2つの世界が一挙に新たなもう1つ別の世界へと「転換」した。この過程を解明するのが、《転換点》に焦点を当てた「社会劇」からの分析である。

キリスト教の多元的な現実の理解を目指す本論文の全体的な構成は，以下のようになっている。第1章ではフィジーに受容されたキリスト教の理解のための理論的な問題点の整理と新たな理論的な試みを提案する。まず宣教師学の立場からのキリスト教の「土着化」「文脈化」理論についての検討と，文化変容の過程を社会劇とコミュニケーション・コード理論から検討し，新たな文化変容モデルを提案する。そしてフィジーにおける「他界」観理解の試みにおいてその多元性と重層する文脈間の関係に焦点を当てる必要性を検討する。第2章では，キリスト教と土着の信仰の関係についての理解を深めるために，「社会劇」としてのキリスト教受容の過程とその社会的，政治的な背景の分析を行う。そこではキリスト教との接触以前の「他界」観，受容の過程，過渡期の形態（トゥカ運動など），現在も存在する呪術師の話，そしてそれらの具体的事例に関するコミュニケーション・コード理論からの検討を加える。第3章では，ヴィワ村の村落生活を，社会構造，空間，時間，経済の諸方面から記述し，それぞれの領域における教会の位置を探っていく。そして教会の諸活動と儀礼の「土着性」，特に生活宗教としてのキリスト教の実態を教会組織とその活動，各役職者の仕事と役職者自身の話から探る。また村の若者と教会ユースの密接だが性質を異にする活動や，教会行事と世俗行事の違いと同質性を結婚式や葬式を例に挙げて検討する。更に現代の儀礼の聖俗両面にわたる分析を通して，

「フィジー・キリスト教」と「伝統文化」とがフィジーにおいては構造的には同じ論理性を持って存在することを明らかにする。結婚式，葬式から謝罪儀礼に至るまで「伝統的」な《訪問儀礼》の構造を持つフィジーの様々な儀礼の中で，ゲストとホストの統合の象徴となる「ヤンゴナ吸飲」，文脈の《転換点》となる多義的な「タムブア（鯨歯）」，そしてあらゆる分野で重要な役を果たす「キリスト教」の意味を，現代の《訪問儀礼》の分析で明確にする。そして第4章では，フィジーにおける信仰生活の多元的現実をより広範囲に検討する。対立の仲介者としての聖職者の役割，個人の生活史にみる「神」の問題，都市と村落の対立する性格を解釈するよすがとしてキリスト教的な「他界」観の信徒による適用，そしてフィジー人にとっては苛酷な都市生活自体が結果的に熱心なキリスト教徒となるための一種の通過儀礼として考えられ得ることなどから，フィジーではキリスト教自体が多元的な文脈の中に位置づけられていることが明確になる。そしてこの現実を理解するためには多元的で，重層し，葛藤・衝突する文脈を解明する必要性が明らかになる。

論文審査の結果の要旨

本研究は，フィジー社会における集中的で長期的な文化人類学的フィールドワークによる研究の成果である。

本論文の目的は，植民地時代を通してキリスト教化したフィジー社会が，それを独自の形で文化的に変容させ，「フィジー的キリスト教」とよばれるような姿を提示していることと，キリスト教化したにもかかわらず土着的で伝統的な「他界観」を保持していることの両面において，フィジー人の「世界観」を明らかにしようとするところにある。この研究の目的を達成するにあたり，著者は徹底した社会調査を行っているが，まずフィジーの教会組織とその社会・経済生活にはじまり，聖職者の社会的位置など生活宗教としてのキリスト教をとらえている。さらに伝統文化との関係において各種儀礼を取り上げ，その詳細にわたる記述と分析を通して，キリスト教という外部からの文化と伝統的土着的な文化との接触と変容の過程を明らかにしている。

本論文は，外見的にはキリスト教化したフィジー社会であるが，この社会の「価値観」や「世界観」を理解するためには，フィジー人の個人的な「他界」体験を併せて考察しなければならないことを明らかにした。そこに「テヴォロ」という名の下に認識されている，キリスト教会からは「異教」として排斥された「土地の霊」の存在が浮かび上がる。

著者は綿密な観察と調査によって，このフィジー人の宗教性の中に重層的に存在する「他界観」を見事に抉りだした。

本研究は，「多元性」と「多義性」という概念でこうしたフィジー社会の宗教文化をとらえている。さらにキリスト教受容の過程を「社会劇」として読み解くことによって，「文化変容」のダイナミックな側面を明らかにした。本論文は第一に「文化変容」の研究，とくにそのダイナミズムの解明としてきわめて重要な研究である。次にキリスト教の土着的変容の研究として大変ユニークであり，宗教研究に多大な貢献をなすものと考えられる。さらにフィジー社会研究としてフィジー研究およびオセアニア研究に大きく寄与するものと評価される。以上をもって本論文が論文博士に十分値するものと判断される。